

## 神のわざへの畏れ

創世記二七章 30～46節

イサクは激しく身を震わせて言った。「それでは、獲物を捕って私のところに持って来たのは誰だったのだ。お前が来る前に私はみな食べて、彼を祝福してしまった。」(33)

祝福の祈りを受けるために来たエサウを前にして、イサクは激しく身震いしました。ヤコブにまんまと騙されたという怒りとともに、自分の思いとは別のところに働いていた神のご意志を直感したからでしょう。妻リベカが双子を授かったときに聞かされた「兄は弟に仕えるようになる」(二五29)という主の御心を思い出したのです。イサクは神のご意志に逆らって、危うく兄エサウを祝福するところでした。ヤコブのやり方は誉められたものではありませんが、神は人間の醜いわざをも取り込みながら、ご自身の御心を進められました。人が止めることの出来ない神の御心に気づいたとき、イサクは神の臨在に打たれ、畏れに震えました。私たちが自分の願いや思いに反する神の確かな御心に気づいたとき、身震いしてそれを受け止める靈の感性を大切にしたいものです。